

教育的視座から見る美術館教育の役割と専門性

渡邊 祐子

東北大学大学院教育学研究科

要約

平成 25 年度大学院生プロジェクト型研究において実施した調査・研究を通じて美術館の基本機能と活動を概観し、教育機関としての美術館の類型化を試みた。本稿は、類型化した美術館の活動から、教育機関としての美術館の役割と専門性、そして教育的要素を考察し、今日の美術館教育における問題を教育的視座から検討したものである。

キーワード：美術館教育、博物館教育、学芸員、生涯学習

はじめに

近年美術館では、社会的要求の高度化や博物館を取り巻く環境の変化をうけ、基本機能はもちろんのこと、情報やサービスなど美術館が持つあらゆる資源を活用した活動を通じて人々に知識を与え、市民が対話し、議論する社会的な場として機能することが求められている。こうした美術館を含めた博物館の多機能化は、その変化に対応する博物館スタッフの専門性を高い質で維持するための「学芸員の養成問題」を浮上させてきた。この学芸員の専門性養成に関する問題は、過去 30 年に渡り重ねられてきた議論や検討を通じて、質の高い人材を育成するための学芸員養成課程の改善・充実への取りくみとして近年の博物館法施行規則の改定などの動きへとつながっている。生涯学習の支援をはじめ、博物館に期待されている諸機能の強化が、「モノ」からではなく、「人」から見直されていることは重要な視点であるが、どのような専門性を高めることが、高度化した社会的要求や美術館を取り巻く環境の変化への直接的な応えとなりうるかについてはいま一度検討する必要があるだろう。

これまでも美術館は、所蔵品を美術史や歴史の中に位置づけ、展示・公開、教育・普及の諸活動を媒体としながら、研究機関としての専門性を来館者や社会に還元してきた。来館者との直接的な関わりを通じてコミュニケーションをはかるための試みは、「講演会」「ギャラリー・トーク」「ワークショップ」「造形教室」などの教育プログラムとして定着し、これまでの取りくみの成果を端的に表わしている。その一方で、これらの活動は、芸術と深く関与する機会となりきれていないのではないかと指摘や、美術館を訪れることのない人を考慮していないのではないかという評価の声もきかれる。これは、展覧会や各教育プログラム自体が美術館体験そのものの意味や質を問い、社会における美術館の存在意義をうたえる段階には達していないことを示唆する意見に他ならない。また、欧米の

美術館の現状をもとにした議論と、わが国の現状とを比較してみると、わが国の美術館でも特性を生かした実践事例がみられる一方で、それらの活動を支える基盤の不十分さが長らく指摘されている。こうした活動の基盤の弱さは、これまで「金」の観点から事業の目的や内容が形成されてきたことと無関係ではなく、それは結果的に、教育機関としての美術館の役割を、本質としてではなく、付随的なものとしてみる態度を生じされる一因となっている。もちろん、財政は「モノ」と「人」とを効率よく動かす原動力であり、美術館運営に欠かせない要素であるが、市場原理による教育活動の実施は、美術館のよき理解者としての消費者量産の活動へと取り組みそのものを転化してきた側面もある。これらのことからすれば、高度化した社会的要求は、これまでの美術館の活動に対する社会からの評価や反応としての要求として理解することができるだろう。本稿は、美術館の役割と美術館スタッフの専門性に関する調査・研究の成果を通して、美術館の今日的な役割と専門性を教育的な視座から検討することを目的としている。また、本研究は、教育機関としての美術館の活動に焦点をあて、社会的要求の高度化の背景にある、美術館教育の本質的な問題の解決を志向している。

1. 美術館教育の多様性

本研究では、美術館や博物館が多数点在する瀬戸内海地域の広島、岡山、香川の三県を中心とした実地調査から、(1)公的機関としての美術館、(2)文化的支柱としての美術館、(3)美術館の枠組みをこえた祭典：トリエンナーレの三つに美術館を類型化した。使命の異なる三つのタイプの美術館を概観することを通じて、教育機関としての美術館の活動や専門性におけるそれぞれの特色を確認したい。

(1) 公的機関としての美術館

「公的機関としての美術館」とは、国民への文化芸術の振興という共通した使命を担い、学習支援活動の拠点となることを志向する美術館である。「公的機関としての美術館」は、都市型美術館としての立地、大規模な施設設備や所蔵、教育プログラムの設置、活字による情報提供、友の会によるボランティア活動、ホームページの充実などの共通した特徴がみられる。特に、作品の所蔵、教育プログラムの開発と提供、人材の確保の量的・質的な基準を満たすことが基本的な条件となり、さらには地域特性を活かした展示活動をおこなうことが求められている。近年では、インターネットの普及や、平等な美術館へのアクセスの観点から、所蔵作品や刊行物をデジタル化し、ホームページ上で公開することも一般的となっている。

本調査を通じて「公的機関としての美術館」の特徴を明らかにした広島、岡山、香川の三県の公立美術館においても地域の芸術文化の発展に貢献することを使命とする共通の活動理念がみられた。各美術館の活動の方向性を指し示すこのような使命は、美術館の自律的な活動の意志をあらわすものであるが、文化芸術振興基本法の基本理念とも重複する

ことから、「公的機関としての美術館」は、特性を活かした主体的な活動の前提として、諸施策の方向性を理解し、館の活動に反映させていることが指摘できる¹。このような活動の指針は、国民の文化活動の参加を可能とする全国的な観点から、各地方自治体の公立美術館の役割や機能を維持するためのものであるが、国との連携が前提されることで、所蔵作品の選定、展示内容や作品の価値づけに規範性が求められるという側面や、活動や来館者の美術館体験が指針によって規格化されてしまう可能性がある。また、「公的機関としての美術館」の標準化された施設設備、所蔵作品、教育プログラム、人員の確保は、必ずしも活動の質を保証するようなものではないことを考慮する必要がある。それは、大規模な施設設備や所蔵をはじめとする美術館の資産そのものが、それを維持するための大きな負担を学芸員に生じさせている現状や、形骸化したプログラムによっても説明されるだろう。学芸員の高い専門性とそれを十分に活用しきれていない美術館組織のずれや、活動力とニーズにおけるずれは、美術館自体が機能不全に陥る原因にもなり、改善策としての諸活動が消費者としての来館者理解を促す悪循環を生み出すこともある。

他方で、「公的機関である美術館」は、国との連携をはかりつつも、その施設設備や位置づけを活用して、郷土性を活かした展示を行うことで、文化活動への参加や美術館との長期的な対話を可能とするための独自性のある展覧会やイベントを実施している。例えば、広島県立美術館（昭和43年開館）²では、「平和」をテーマにした「ピース・ミーツ・アート！」展（2013年7月20日～10月14日）³において、「再生」「対話」「平和」を重要な概念に、戦争や原爆の惨禍を経て日常の再生を願う事で生まれてきた様々な作品のメッセージを発信する企画展を開催し、所蔵作品展「所蔵作品を中心に『紹介します。広島県立美術館の新しい仲間たち』」展（平成25年10月19～12月25日）では、反戦・反核を訴えた鯉江良二の所蔵作品などの展示を行っている。これらの展覧会活動は、郷土の歴史や文化と美術館との関連を明らかにし、その土地が持つメッセージ性を展示や教育に反映させ、来館者との対話を試みるものだといえる。また展示では、作者、制作年、タイトルや、キャプションのほか、鑑賞の補助としての解説シートや出品リスト、作品鑑賞カードの配布、内容を詳しく紹介する映像やタッチパネル式のモニターによる鑑賞の補助など、ほとんどの場合活字による情報提供や教育的配慮が随所にみられ、人的媒体としてのボランティア・スタッフによる解説は、来館者とボランティア・スタッフ双方にとっての学習の機会として機能している。このように「公的機関としての美術館」は、社会教育施設や公教育機関のひとつとして、教育プログラムや教材の提供に注力していることが指摘できる。設備面では、情報コーナー、ビデオコーナー、図書室など情報収集のためのスペースが設置され、プログラム面においても、キャプションや解説シート、美術館講座、ワークショップ、ボランティアによるギャラリー・トーク、対話型観賞体験などのイベントの提供、学校との連携などが行われている（図1）。



図1 ビデオコーナーと情報コーナー

また、中には、美術館の仕事、作品ができる過程、作品の楽しみ方を、観客の積極的な関与とともに学ぶことを目的とした教育的展示を目的とする企画展も行われていた(図2)。



図2 教育的展示のキャプション

他方、岡山県立美術館(昭和63年開館)で開催された「中原浩大展 自己模倣」展(2013年9月27日～11月4日)では、展覧会のテーマを決め、作品を借用し、解説を書き、観客にむけて展示するという学芸員の従来の専門的活動のみならず、美術作品と観客との間をとりもち、さらにはこれまで見出されてこなかった美術館や美術に関する価値の発掘や意味づけ、魅せ方見方を展示を通じて模索する試みもみられた。「公的機関としての美術館」に位置づけられる美術館の役割は、公共的な文化領域における美術館としての活動と、地域性や館の独自性を活かした活動の提供にあり、その専門性は、所蔵作品の展示による各美術館の全体像を示す所蔵作品展と、人々の間にある議論を学芸員の力量によって美術館の中に反映させる特別展のバランスの取れた開催にあるといえる。

(2) 文化的支柱としての美術館

「文化的支柱としての美術館」とは、設立の理念が現在の活動の基盤として働き、地域の精神文化の支柱となることを志向する美術館である。ここでは、岡山県倉敷市中央の大原美術館と香川県木田郡牟礼町のイサム・ノグチ庭園美術館における活動の概観を通じて、「文化的支柱としての美術館」の役割と専門性から教育的要素を考察したい。

○ 大原美術館

現在でも 18 世紀の面影を残す白壁の家並みが倉敷川沿いに続く、倉敷美観地区の中央に位置する大原美術館は、1930 年倉敷出身の実業家である大原孫三郎によって、日本で初めて西洋美術作品を本格的に展示公開する美術館として開館した私立美術館である。その特色としては、個人の趣味による収集ではなく、当初から一般の人々に優れた美術作品を公開することを目的としていることがあげられる。同館は、西洋近代の絵画と彫刻を展示する本館、日本の近代洋画から現在活躍する作家たちの作品を展示した別館、日本民芸運動にかかわる作品や中国古美術品を展示した工芸・東洋館の 3 つの館からなり、そのほかに他館のチラシや図録を閲覧できる情報コーナーやミュージアムショップなどが設けられている。年間 40 万人の観客をむかえる大原美術館の館内は賑わいをみせ、「倉敷を精神文化のひとつの拠点にしたい」という学芸員の想いを体現するように、歴史的な美観地域の精神文化の拠点としてという土地にとけこんでいる (図 3)。



図 3 美観地区にとけこむ大原美術館の外観と周囲の風景

「人と美が出会う場所」である大原美術館は、作品の展示・公開だけにとどまらない幅広い教育普及活動を展開している点にその特色がみられる。その多彩な教育普及活動は、学校丸ごと美術館、未就学児童対象プログラム、出前講座、博物館実習、ギャラリーツアー、高階秀爾の美術教室、夏期美術講座、ワークショップ、チルドレンズ・アート・ミュージアム、生き生きパスポートや学校との連携など 10 以上に及び、親子向けから大学の講座レベルまで、メニューの幅が広く、実施頻度も高い。これらの活動には、美術館の保存機能と禁止事項の伝達、展示作品への理解を高める目的が含まれ、単なる知識提供型の

教育というよりも、来館者が美術館という場に慣れ、作品と良好な関係を築くためのイントロダクションとして活動が機能している。また、館内の作品を鑑賞してまわると、知識伝達を目的とした解説パネルや配布物等の活字が控えられていることが分かる。このように活字による情報提供に重きを置いていないのは、観客の多義的な作品鑑賞の機会を奪わないようにする配慮によるものであると考えられる。その一方で、人間を媒介とした教育普及活動の充実や、アテンダント・スタッフ、警備職員の配置により運営が支えられており、大原美術館の専門性は、対象者層、手法、到達目標を、来観者や利用者とのかかわりの中で協働でつくりあげる手腕にあるといえる。

○イサム・ノグチ庭園美術館

四国・香川県の歴史ある屋島と五剣山のはざまにある庵治石の産地として有名な牟礼町に位置するイサム・ノグチ庭園美術館は、住宅地の一角にひっそりとたたずむ。駅から北へとのびる美術館への道中には、数多くの石材店が立ち並び、人家の軒先にも石のモニュメントが置かれるなど、牟礼が歴史的な石の街であることを感じさせる美術館までの流れがあり、鑑賞のイントロダクションとなっている（図4）。



図4 イサム・ノグチ庭園美術館への道程とイサム・ノグチ庭園美術館の概観

イサム・ノグチ庭園美術館は、牟礼町のアトリエ空間にある150点あまりの彫刻・展示場・住居・庭園などが、未来の芸術家や研究者、そして広く芸術愛好家のためのインスピレーションの源泉になることを強く望んでいたノグチの遺志を実現し、美術館として公開したものである⁴。同庭園美術館は、いくつもの点で他の美術館と異なる特色をもつ。そのひとつとして、美術館空間のつくりがあげられるだろう。イサム・ノグチ庭園美術館は、庭園美術館を一つに収める建屋などはなく、庵治石をつみ重ねたサークル状の石壁によって形成された内部空間での屋外展示、作業蔵の公開、またサークル外の敷地での屋外展示、展示蔵、その向かいに位置するイサム家と背後にある広大な丘の彫刻庭園、そして少し離れた場所に設けられた資料販売グッズ販売なども行う受付など、個々の空間の集合体として全体が形成されている。美術館内部と外部の境は確認できるものの、周囲の環境との完

全なる断絶がないため、屋島や五剣山を背景に、自然のもとで彫刻や庭園全体を觀賞することができる。ノグチの彫刻作品や敷地全体、そして周囲の自然環境との調和によって形成される美術館体験は、庭園美術館全体が「大きな彫刻」であり「環境彫刻」であることを来館者に体感させ、庭園美術館そのものがアート作品として提示される。

イサム・ノグチ庭園美術館は、研究や教育を目的として開館している美術館であるが、作品の解説となるキャプションや見学ツアーの案内人による積極的な觀賞への介入は見受けられないし、教育普及に特化したプログラムが設置されているわけでもない。実際にイサム・ノグチ庭園美術館を来館すると、来館者は作品や庭園美術館の保存に関する三点の注意や最低限の説明をうけた後、制限時間の中で自由に作品を観てまわり、疑問があればツアーの案内人に質問するなどして作品やノグチの世界像を味わい觀賞を楽しむこととなる。ここでの觀賞は、活字情報や人的要因への依存によって成立するような性質のものではなく、ノグチの彫刻そのものの形や存在が放つ美を心とからだで感じとりながら、インスピレーションを学びとるような性質のものである。つまり、美術館の純粋な基本機能と、作者の意図や彫刻の持つ意味を越えたデザインにおける形の意味によって、来館者は各々の目的のための美術館体験をするのである。ここでの美術館の役割は、イサム・ノグチ庭園美術館の保存および維持管理、作品の普及、作品および資料の収集、保存、展示、調査研究を通じて、イサム・ノグチの精神を携えた場所とモノを守り、自然環境とともに受け継ぎ、人々の交流と芸術の振興をはかることにある。また、その専門性は、それを実現させる活動や理念の継承にあるといえる。

「文化的支柱としての美術館」には、「公的機関としての美術館」とは対照的な中央の大都市から幾分か離れた立地、周囲環境との調和、比較的小規模な設備や所蔵、創立者や作家の精神・思想が反映された活動といった共通した特徴がみられる。こうした特色は、土地と美術館、美術館と所蔵作品、作品と理念、理念と活動の親密な距離感と一体感を生み出し、個々の美術館の固有性と価値を体現する要素として機能している。特に、地域や日本の美の発信地として、継続的な活動を通じた人々との交流や周辺環境にとけこむ美術館のたたずまいといったものが調和を生み出し、公共的な場でもある美術館を来館者の私的な領域に引きよせ美術館の存在感や価値を伝えている。

また、「公的機関としての美術館」と比較すると、美術館内で提供される情報の量や方法、プログラムの編制はさまざまであるが、「文化的支柱としての美術館」は、所蔵作品に対する所有意識と価値認識が高いという共通点も見うけられた。このような専門スタッフの所蔵品に対する態度は、決して来館者との価値の共有を阻むものではなく、価値の伝達を強く望む意志となり館の機能や活動に反映されている。また、調査対象となった二つの美術館では、美の内在する力や美的体験そのものの重要性を認識した觀賞体験、教育プログラムの提供とともに、作品を尊重する態度を育てる教育的視点が活動に取り入れられ

ていた。これは、美術館の基本機能である「収集・保存」の機能を説明するものでもあり、美術館の社会的役割を説明するものである。「文化的支柱としての美術館」は、美術館の基本機能に加えて、美術館の役割と作品や美の尊さを伝え、文化や精神をはぐくむ場所として、その価値を人びとに伝え、継承する役割を担っている。また、地域と美術館とが互いに引き立て合うなかで、来観者が作品自体の発する美に共感し、ひきつけられることによって美術館との親和性を育てゆく手法の中に、所蔵作品の価値や美しさをよく知るもの、そして美とのふれあいを提供するものとしての専門性を確認することができる。そこには館の存続だけではなく、「鑑賞者が自身の資質や経験を見つめ直したり、他者との関係に気が付いたり、さらには作品から受けたインスピレーションによりさまざまな想像を羽ばたかせるなど、作品の美を基点にして鑑賞者の内面の見直しや、さらなる想像がはじまる」⁵ ための来館体験を構成する視点があり、文化をはぐくむ人間を育てるために美術館を役立てようとする教育的態度をみることができる。

（3）美術館の枠組みをこえた祭典：トリエンナーレ

「美術館の枠組みをこえた祭典：トリエンナーレ」は、都市や島そのものを美術館あるいはアートとして見立てることで、地域に密着したコミュニケーションとしてのアートを志向する活動であり、従来の美術館の観賞の枠組みを超えた芸術参加のひとつの形態を示すものである（図5）。



図5 島と一体化したアートと島をつなぐ海と船

本調査の対象となったトリエンナーレは、三年に一度開催される国際美術展覧会で、二年に一度開催されるビエンナーレと同様に、1990年代以降世界各地で開催されはじめたアート・プロジェクトの一種である⁶。同様の活動は、国内では1990年前後から確認されはじめ、2000年代に入って定着してきた。2010年に続き2013年に2度目の開催を迎えた「瀬戸内国際芸術祭2013」も、トリエンナーレの形態で開催されるアート・プロジェクトの一つで、同芸術祭は、「アートと島をめぐる瀬戸内海の四季」⁷をテーマとして、瀬戸内に浮かぶ香川県と岡山県の12の島と2つの港を舞台に、26の国と地域から集まった現

代アートの作家や建築家たちが、そこに暮らす人びととアートを制作・展示することを通じて、美しい自然と人びとが交錯してきた瀬戸内の島々に活力や固有の価値を取り戻すことを趣旨としている。

瀬戸内国際芸術祭の特色は、伝統文化や人びとの生き方を主役とし、生活空間の中で自然と人間がアートをつくりだす点と、芸術祭の発するメッセージを参加を通じて人びとが体感するという点にある。参加者は、観賞体験を求めて港から港へ、地区から地区へと、船やバスなどを乗りつぎながら島の内外をめぐるが、この美術館体験一般にはない大掛かりな移動という体験が、生活風景や自然風景とアートとの出会いを生み出す原動力となっている。参加者は、「興奮と刺激、競争と大量の表紙、情報に追われる都会から一人ひとりの責任で動き、五感を開放できる世界」⁸を求めて、主体的な体験者となる。この主体的な体験において、あらゆる参加者は地域や自然、その土地の個々の文化と向き合うマナーやセンスを磨いたり、人と人とがつながって、そこで生活する人びとを知る可能性に開かれており、これが一つの経験的な学習機会となっている。この自由な体験における主体性を引き出す装置としてのアートという発想や、体験をまちづくりの活力へと還元しながらまちとアートの関係を形成していくという性質は、美術館一般にも活動のヒントとなる多くの要素をもっており、このタイプのアート・プロジェクトが有する専門性だといえるだろう。

また「美術館の枠組みをこえた祭典：トリエンナーレ」は、島自体をその場所に帰属する新しいオブジェへと帰化していくことで、島の経済の再生、その歴史的過去をふくめた土地の浄化、芸術と現実の生活の結合を志向するという特性をもつ⁹。「瀬戸内国際芸術祭 2013」の舞台となったそれぞれの島も、犬島の製錬所跡、豊島の産業廃棄物不法投棄の問題、大島のハンセン病の国立療養所など、過去からの記憶を継承しつつける土地である。島をめぐる観賞体験には、グローバル化、効率化、均質化が現代社会にもたらした問題を、主体的な参加体験を通じて感じ取る機会を提供するという意図もある。そこには、従来型の美術館と所蔵作品のイデオロギイ的な構成に対する問題提起もふくまれており、個性的で独特の日常と非日常の世界が混在する島全体を最大の総合蔵芸術作品として参加者の前に提示することで、美術館という場を含めた社会全体の課題を突き付け、芸術の民主化をはかるねらいがある。

2. 美術館教育の現状と課題

(1) 美術館教育の目的と教育的諸要素

以上の三つの類型を総観すると、美術館は「収集・保管」「展示・公開」「調査・研究」「教育・普及」という基本機能をその専門の基礎におき、それらをさらに環境や設備、人的要員などによって補完しながら応用、発展させて、教育活動を提供していることがわかる。特に、美術館教育における目的意識や場といったものが、教育活動の性質や内容、手法におけるちがいを生じさせていることが指摘できる(表1)。これは、美術館教育の多様

性は、(1)単に教育活動の充実を意味するものではなく、(2)美術館の専門性以前の諸条件（使命、理念、教育観、来館者理解）のちがいによって生まれる偏差でもあることを示すものである。

諸要素	公共機関としての美術館	文化的支柱としての美術館	トリエンナーレ
目的	芸術文化の振興、生涯学習、将来の支持基盤形成	学習支援、美的体験、文化を育むこころ、価値の継承	まちづくり、芸術と生活の統合、アートの民主化
対象	地域住民、児童・生徒、親子	研究者、芸術家、国内外の来館者	住民、ボランティア、参加者
場所	施設内	施設内外（周辺環境との調和）	島全体
設備	情報コーナー、ビデオコーナー、図書室、ミュージアムショップ	情報コーナー、ミュージアムショップ	地域の文化、生活、自然
教材	キャプション、解説シート、実物作品、ビデオ、ワークシート	実物作品、プログラムによって適宜与えられる	地域の文化、生活、自然、歴史、実物作品
指導者	学芸員、教師、ボランティア、アーティスト	学芸員、ボランティア、アーティスト	地域住民、アーティスト
来館	オープン	オープン/予約制	会期が限定されている
所蔵	地域ゆかり、世界の名作	創設者、作家ゆかり	国内外の現代アート

表1 美術館教育における要素とその主な傾向¹⁰

またこれらのちがいは、それぞれの美術館教育における教育観のちがいを示している。「公共機関としての美術館」は、設備や教材、プログラムなどの教育のコンテンツの充実が第一義的に求められるために、その学習は、知識を教授する傾向が強くなったり、意図的な学習が前面に押しだされたりする。この性質は、美術館教育が学校教育と相互に補完し合う関係を築きやすくするもので、教科教育的要素による学力の向上が教育観として強く表れる要因となっている。一方、「文化的支柱としての美術館」では、設備や提供される教材、プログラムの編制などは館によってさまざまであるが、その教育は、周辺環境も含めた作品全体との自然なふれあいによって育まれる感受する力を育てるもので、偶発的な学習の傾向を強める。もちろんこれらの教育観のちがいは、より詳細に細分化され理解されるべきものであるが、美術館の使命や教育の指針のちがいが美術館教育の性質を方向づける要素となっていることを示す好例だといえる。また、「美術館の枠組みをこえた祭典：トリエンナーレ」など、伝統や生活、自然をそのまま活用しアートと人とで動きを巻き起こすアート・プロジェクトの役割と専門の特殊性をふくめ、異なる教育的機能を有する複数の美術館教育を組み合わせることで、社会的で個人的な美術館教育の学びに、線的な広がりから面的な広がりをもたせることも重要であろう。

（２）美術館教育をおこなうための資質の問題

これまでそれぞれの美術館の活動の考察を通じて、その多様性を確認することができた一方で、調査を通じて見えてきたのは、美術館の役割や来館者に対する理解のばらつきであった。これは、美術館の教育原理が確立の途上にあることによるもので、それらは美術館教育を行う際の職員の資質の問題を浮上させる。

現在の美術館教育の考え方や実践が注目され広がってきたのは、1980年代後半からのことであり、美術館教育はこれまでの継続的などりくみを通じて、その活動は実験段階から実用段階への移行がすすめられてきたように思われる。一方、今日においては、近年の政治、経済、文化の動向の影響を美術館教育が多分にうけるかたちで、生涯学習をはじめとする学習支援の場としての美術館の活動がサービス産業としての特色を帯びてきていることも否定しがたく、館によっては教育活動の規模自体を縮小せざるを得ない状況がある。美術館教育における手法や技法はある程度形式化され、それぞれの美術館に認知、適応されてきた一方で、手法や技法を習得するだけでは美術館教育の発展が望みにくいことを、美術館教育における資質に関する問題と関連して理解しなければならないだろう。もっとも、美術館の学芸員と、教育者に求められる資質には根本的なちがいがあがあるが、研究機関というだけでなく、教育機関としての活動を美術館が志向するのであれば、美術に関する専門的技術者、専門的研究者としての力量とともに、教育者としての基本的資質が求められるのは必然であろう。

この資質とは、ひとつに「なぜ美術館で教育なのか」「教育とはなんであるのか」を追求し活動に反映させる態度であり、またひとつに、一人ひとりの来館者の成長をうながす活動として教育的文脈—来館者への配慮から美術館の活動を考究する意欲である。この、教育的文脈で美術館活動を行うための資質は、調査を通じて多くの美術館に見受けられたが、財源獲得の支持基盤を形成するために来館者をサービス利用者や消費者とみなす美術館では、施設設備やあらゆる教育的配慮が形骸化し、教育的意図が観賞の妨げとなっている例もみられた。一方で、内発的な動機から活動を教育的文脈に位置づけ、来館者を考慮した活動を行う美術館では、展示や手法、教育プログラムといったそれぞれの要素や機能がうまくかみ合いながら、館の価値を体現し、地域住民をふくめたあらゆる人びととのよりよい関係を育むものとして教育活動が実現されていた。美術館教育を考えると、美術館教育に関する手法や技法そのものを目的化することなく、来館者の発達段階やニーズを考慮した活動を志向する態度や意欲から、来館し参加する人たちに何を体験させたいか、なにを伝えたいかという目的意識を明確にもち、来館者の主体性を尊重する活動をおこなうことが重要である。これは、美術館がいかなる教育観や来館者理解をもつかの問題であり、この問題は専門的技術者、専門的研究者の問題に先立つものである。

おわりに

現地調査と研究とを通じて現在の美術館教育を概観すると、手法や技法がある程度形式化し美術館に広く応用され、各館は異なる目的意識のもとで独自の活動を遂行し、その社会的価値を再現していることが確認できた。しかし、ここには方法の目的化という現状における問題があり、それは来館者を考慮した活動を志向する教育的視座から克服される必要がある。

また、調査を通じて明らかになった三つの類型からは、これらの教育プログラムと美術館の使命と役割の関連が示され、設備やプログラムの整備が必ずしも活動の質を保証したり規定したりするものではないことが指摘された。これらのことから、美術館教育の役割や専門性において重要なのは、講習を受ければ身に付けられるような技術を身に付け、美術館に社会教育的機能を付与することではなく、土地と美術館の親和性をはぐくみ、観客の見る目を育て、観客からの意見に耳を傾けるための美術館教育者としての資質を獲得することである。芸術という創造活動と同様に、美術館にも斬新さや新しさが求められはじめている観があるが、美との触れあいや出会いを求める来館者の様子を見ると、美術館の活動の斬新さだけが来館の動機となっているわけではないことがわかる。美術館来館者は、美との触れあい方、出会い方を教わるために、さまざまな教育プログラムを利用しているのであり、これからの美術館教育は、来館者のニーズ、興味、関心を考慮し活動を行うための教育理論の確立によって、専門性の養成がはかられていくことが重要であるといえる。

参考文献

- 『美術教育にディスプリンは存在するのか？—80年代の美術教育を展望するための試論—』藤江充、愛知広育大学研究報告、1987年。
- 『学芸員養成の諸問題について』矢島國雄、明治大学学芸員養成課程年報、1987年。
- 『美術教育を軸とした学校と美術館の連携について』藤江充、愛知教育大学研究報告、1997年。
- Hein, George. "Constructivist learning theory." *Institute for Inquiry*. Available at: <http://www.exploratorium.edu/ifi/resources/constructivistlearning.html> (1991).
- Hooper-Greenhill, Eilean. "Museum learners as active postmodernists: contextualizing constructivism." *The educational role of the museum* (1994): 67-72.
- Hooper-Greenhill, Eilean, ed. *The educational role of the museum*. Psychology Press, 1999.
- Hein, George E. "The constructivist museum." *The educational role of the museum* (1999): 73-79.
- Hooper-Greenhill, Eilean. "Changing values in the art museum: Rethinking communication and learning." *International Journal of Heritage Studies* 6.1 (2000): 9-31.
- Hein, George E. *Learning in the Museum*. Routledge, 2002.
- 『かえるがいる—大原美術館 教育普及活動この10年の歩み 1993-2002』財団法人大原美術館、2003年。
- Hein, George E. "Museum education." *A companion to museum studies* (2006): 340-352.
- 『ミュージアム新時代—世界の美術館長によるニュー・ビジョン』建島哲編著、慶応義塾

大学出版会、2009年。

『美術館 NEWS 第101号』岡山県立美術館、2013年。

『瀬戸内国際芸術祭 2013 公式ガイドブックアートをめぐる旅夏・秋』北川フラム、瀬戸内国際芸術祭実行委員会、美術手帳編集部、美術出版社、2013年。

注

- 1 館が自らの事業の方向性を社会の変化に対応させるための活動基盤の整備に焦点を当て、地域との関係の強化と国際的な交流の拡大に資する取組が志向されている。また、平成23年度からは、美術館・歴史博物館が中心となった地域文化資源活用、地域連携強化、新規利用者層創出、国際交流拠点形成についての支援活動も行われている。
- 2 昭和43年に開館した広島県立美術館は、「広島県ゆかりの美術作品」「日本とアジアの工芸作品」「1920年代から30年代の美術作品」をテーマに、4200点余りの所蔵作品を所有し、大型の巡回展、美術展や工芸展のほか、地域の歴史的特性を活かした企画展などを開催している。
- 3 広島の歴史地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「アート・アーチひろしま2013」において、広島市の3つの美術館とサテライト会場において開催された企画展。
- 4 イサム・ノグチは、20世紀を代表する彫刻家であり、モニュメント、庭や公園などの環境設計、家具や照明のインテリアから舞台美術まで幅広い活動を行った芸術家であるが、1956年に初めて牟礼町を訪れ、1969年からこの地にアトリエと住居を構えて以降20年あまりの間、ニューヨークと牟礼町を行き来しながら制作活動に励んでいた。
- 5 『かえるがいる-大原美術館 教育普及活動この10年の歩み 1993-2002』財団法人大原美術館、2003年、p.265。
- 6 近年の世界でのトリエンナーレでは、国際交流や地域振興等を目的としてファインアート、舞台芸術、デザイン、音楽など様々な芸術分野から世界各地の美術家を招待し、展覧会を開催している。
- 7 「瀬戸内国際芸術祭2013」は、春（2013年3月20日～4月21日）、夏（2013年7月20日～9月1日）、秋（2013年10月5日～11月4日）の3シーズンで開催された。
- 8 『瀬戸内国際芸術祭2013 公式ガイドブックアートをめぐる旅夏・秋』北川フラム、瀬戸内国際芸術祭実行委員会、美術手帳編集部、美術出版社、2013年、p.11。
- 9 『ミュージアム新時代—世界の美術館長によるニュー・ビジョン』建畠哲編著、慶応義塾大学出版会、2009年、p.104。
- 10 美術館の類型と教育的諸要素を表にした表1は、美術教育を軸とした学校と美術館の連携について思案した藤江（1997）の学校教育と美術館教育の特色を表によって説明した項目、区分を参照している。